

幸便に北海道周遊に出かけた。北方は涼しい筈と考えたのは早合点で、大陸的盆地で矢張り 30 度を超える暑さであった。知床半島に向い、初めてオホーツク海を望んだ。暗い海の印象だが、好天に恵まれ、知床峠からは国後島が間近に見えた。バスは根室海峡を左手に納沙布岬まで運んでくれたが、終始、かの北方領土が視界にあり、「北方領土よ、還れ」の碑が随所に見られた。北方領土資料館では歴史上、国際法上等の知識をまとめた資料をもらった。現在、漁民はロシア側に入漁料を支払い、昆布漁をしているという。貝殻島付近の昆布は柔らかく、棹前昆布として高値で取引され、入漁料を払っても高収入を得ているという。今となっては、漁場が確保されれば、墓参以外に用はなく、返還されても長らく異国となっていた離島に引っ越しする人はいないかも知れない。

もう 40 年も前になるが、私はベルギーのアトリエ事務所にて在籍し、ブリュッセル郊外のラ・ユルプという街に住んでいた。ある時、隣村にお祭りがあるというので出かけたが、話す言葉が異なり、人々の様子も違っていた。馴染みのないフラマン語圏の地であったのだ。私の住んでいたのはフランス語圏のワロン地区で、つまり、言語

境の町に住んでいたのだった。ベルギーという地域は紀元前後にローマ帝国の支配をうけて以降、周辺の大国、領土の支配の消長に統治が委ねられた歴史で、1830 年に漸くオランダより独立したばかりでありながら、現在は欧州連合の首都的な存在となっている。その紆余曲折の理解は容易でないが、終始、支配権の交代、国境のありかが住民を苦しめていたに違いない。しかし、課題を含みながらも、現在の地位にあるのはしたたかな外交の成果なのであろう。

最近、日本の北方領土問題と立場を変えた、離島の帰属問題が韓国、中国との間で起こっている。我々にこれらの島々の歴史的な背景、現実の経済的環境の理解が十分であろうか、歴史的とえば、過去に日本から宮古・八重山諸島を清国に割譲する提案をした（1880 年）事があるという。このような歴史的経過も正しく知らないと足元をすくわれかねない。帰属の確かな証拠、これら無人島に対する実効支配の実績も確認しておきたいものだ。

納沙布岬を去る時、根室市長発行の「北方領土視察証明書」というのが配られた。（了）